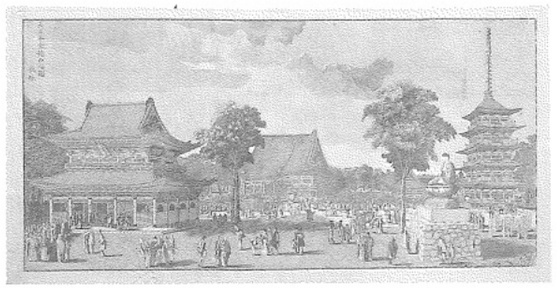
ったと思われる。

それに付け加えるならば、田善は《フォンテーヌブロー、運河の景》を見ていた可能性が考えられる。それは左脇下の二匹の対峙する犬が、田善の《佃浦風景》の犬を思わせるからである〔図10〕。他にも《驪山比翼塚》の白井権八の姿態が本図右下の人物と同様のポーズをとっているように思われる〔図11〕。或いは一点透視法による強調された構図や様々な人物の配置、樹木の葉叢、雲の描き方などは、本図やリゴーの諸作品から修得することによって《大日本金龍山之図》〔図12〕のような大作が作られたと想像される。

11 《驪山比翼塚》の白井権八とリゴーの人物



12 《大日本金龍山之図》

和田英作校長の東京美術学校改革
——芳武茂介と大智浩のめぐり逢い

森　仁史

昭和七年（一九三二）三月三十一日、正木直彦は東京美術学校長を退任した。『回顧七十年』（学校美術協会出版部、昭和十二年）によれば、正木は堺の商家の生まれで、幼名を政吉と言ったが、大学卒業時に改名している。明治十四年（一八八一）五月堺県中学を出て、二十歳にして熊野小学校長を努めたが、十六年工部大学入学を志して上京し、中村敬宇の同人社に入った。十七年九月大学予備門に合格し、在学中に『いらつめ』の編集に関わったが、それは創刊号のみにとどまった。二十五年（一八九二）に東京帝国大学法律学科を卒業した。福原鐐二郎と同期であった。大隈重信からの誘いを断って明治生命に就職したが、体調不良となり、かねて知遇を得ていた税所篤の仲介で二十六年十月奈良県中学校長に赴任した。郡山の北方九條村に旧家を借り、この庭に植わっていた十三本の松にちなんで十三松堂を名乗った。在任中に古美術に興味を深め、調査に訪れた伊東忠太と薬師寺で拓本をとったりしている。奈良帝室博物館が開設されることになったとき、館長を兼任することになった古澤滋県知事、主事兼任の福原鐐二郎参事官とともに、学務委員として社寺からの所蔵品借用交渉にあたった。準備中に開館後の博物館活動に必要な予算に不足を感じて、宮内省に増額を

認めさせたが、この経緯を上申されなかった博物館総長九鬼隆一はこれに不満だったため、正木らは九鬼に協力しようとしなくなった。しかし、二十九年九月内閣総理大臣が山県有朋から松方正義に交代すると、古澤と福原は石川県、鳥取県に左遷されてしまった。

三十年（一八九七）六月岡倉覚三が大村西崖、下村観山を伴って正木を訪れた。用件は奈良に美術学校分校を創設するためだったが、町の態度が不明瞭だったので郡山に用地を確保させ奈良を牽制しようとしていた。この直後、正木は文部大臣秘書官に任命され、ほぼ同時期に岡倉は校長を免ぜられた。岡倉の画策にのせられた奈良町が用意した分校用地は宙に浮いたが、その後明治四十一年（一九〇八）女子師範学校に利用された。正木は三十一年末から文書課長に転任し、この時彼が編成した美術局予算は大半が削減されたが、残った欧米の美術館調査費で正木が派遣されることになり、三十二年十二月に出発した。三十四年（一九〇一）アメリカ滞在中に菊池大麓から帰国要請が届き、交代した桂太郎内閣で文部大臣となった菊池から八月に美術学校長を委嘱されたのであった。爾来、三十年余りその職にあったことになる。

長々と正木の経歴を書き留めたのは明治前半のように美術をめぐってその概念と制度を創出する時代と異なり、いちおう整えられた体制とシステムのなかでそれらを有効に運営したり、政策意図を実現するためのマヌーバーに正木がいかに長けていたかを確認しておきたかったのである。また、美術学校にとっては、形が出来上がってきた美術を確かなものとする行政手腕こそが必要な時期であったともいえる。それはむろん、創作の方向とか、それを意義あるものとするための理念とは無縁であらざるを得なかった。

正木の後任をめぐっては文部省が挙げた行政官は学内から反対が強く、教員の強い要望で彼らが納得できる人物として西洋画科の和田英作が選ばれ、昭和七年五月に校長に就任した。これについて東京朝日新聞は横山大観に美校改革案を求め、横山の「東京美術学校改革意見」は六月十—十三日に「美術教育の根本精神を論じて当面の問題に及ぶ」（『美之国』に転載）との見出しで発表され、洋画家校長は「排撃せねばならぬ」と主張した。その主張は

校長は国粋的高人たるべく、必ずしも芸術家たると否とを問はず。教職員諸氏は校長の国粋精神に和して真個に日本男児養成の実を挙ぐることを心がけねばなりませぬ。

といった塩梅のただただ声高なばかりの掛け声の羅列に過ぎなかったが、これをきっかけに美術教育論議が高揚したことは事実である。とくに『美術新論』は同誌が地方の美術志望の若者や愛好家を読者としていたためか記事が多かった。今回閲読したのは金沢高等工業学校旧蔵本〔図1〕だったが、地方の工業学校生徒が読みたい雑誌に挙げられていたのだろうかと想像した。この雑誌の昭和七年三月号から断続的に論考が掲載され、九月号は「日本画及洋画の国画的立場」なる特集が組まれた。とは言っても編集部は美術講習の企画運営に忙しいくらいなので、自ら議論を展開するのではなく、アンケートを送り四十三名の回答と談話を集めたのであった。答を求めたのは大半は画家で、そうでないの

1　金沢高等工業学校蔵書印

は児島喜久雄、金原省吾、酒井犀水くらいであった。内容もそれぞれが日頃抱いている感懐を述べているだけで、一定の結論を導こうとしているわけはなかった。「現在の日本人の生活感情を十分造型的に表現し得た作品が出来ればそれでいゝ」（児島）とか「便宜上日本画、西洋画と区別される場合があつても本体としては区別さるべきでない」（土田麦僊）といったまっとうな意見もあったが、「日本画には、日本画の長い伝統があり、西洋画の長い伝統とは、必ずしも一致できない」（金原）とか「研究する、鑑賞する場合は芸術に国境なしとも言へやうが。作家が制作する場合には、私は国境ありといひたい。」（松林桂月）といった見解も根強かった。総じて洋画家には日本画洋画の区別を認めない意見が多く、美術教育者と日本画家の一定部分は日本画を国画と強調しようとしていた。また、同じ時期に美校を退いた久米桂一郎はエッセイであるべき美校校長を検討し、「美術学校生徒の赤化問題」に神経をとがらせ、それを防ぐ意味でも「教授と学生の精神的融合」（同前五月号）を求めている。そして、こうした課題を担うのは「常識に欠けてゐる」美術家でないほうが適当だと主張した。

実際に和田英作は就任してどんな改革を実施したのであろうか。和田は前記の『美術新論』特集号に「かく信じ、かく行ふ」という所信を発表した。和田は美術学校生徒にとって、「学生生活を送る数年間は最も大切な基礎工事の時代」だと位置づけるとともに、「日本の美術のために―といふ一つの理想の上に協力して」『朗らかな自由な楽園にしたい」と構想を表明している。

和田校長の改革はまず七月図画師範科主任を平田松堂（十一月退職）から結城素明（日本画科との兼任）に交代させることから始まった。これは和田が美校なら師範科卒業生も「技術は優秀であらねばならぬとの世間一般の期待」に沿うためには従来の師範教育家では不十分だと考えたからであった。また、図画教育教材の編集販売を行っていた錦巷会に営利事業からの撤退を求めたが、これが実現できないという理由で七月二十二日に同会事務所を校内から移転させた。

同じく七月に図案科においても長く中心となっていた主任島田佳矣と千頭庸哉に代えて、廣川松五郎を助教授とし、八月に一旦大沢三之助を主任とし、十月に和田三造を教授に就任させた。前任の二人はともに美校図案科創設期の卒業生であり、島田は明治三十五年から、千頭は三十四年から奉職していたから、正木と同様三十年余りその職にあったことになる。彼らは明治前半に美術保護奨励の時期に教育を受け、その時期に重要とされた文化財の文様、図像研究に従事してきたのであった。ところが、ジャポニスム衰退以後は図案には製造や広告といった実務的な需要が拡大してくるのだが、それにはとても対応できなかった。このために大正八年（一九一九）斉藤佳三や今和次郎が講師として招かれたが、科としての対応は不十分なままであったことは明らかで、和田はそれを抜本的に変えようとしたのであった。

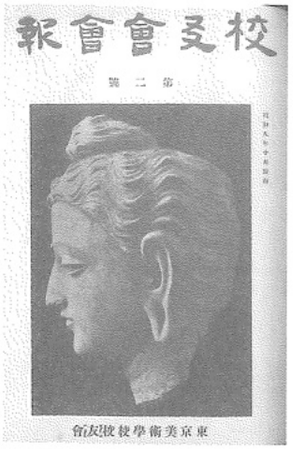
また、例年夏季休業中に日本画科、彫刻科学生の制作のために教室を貸し出していたことを止めさせた。これは教官が審査に関わる可能性のある展覧会出品のための制作から学校を切り離したいという意向のためであり、学生は基礎形成の時期なのだから、「帝展に在学生で彫刻など出品するものがあるが、殆どエチユードに終わってゐる。あれでは出品の意義をなさない」というのが和田の考えであった。六月二十五日の教授会による貸出不許可を聞いた学生は集まって抗議したが、

学校は翻意せず、代わりに和田、建畠、北村教授が私費でバラックを提供するとの提案に納得し、騒ぎは収まった。

美校ではチャカホイ節が歌われていたようだが、校歌はなかった。それで、十月在校生に校歌歌詞を募集したが、応募がなく一月延期しても八名しか集まらず、あげくに委員会の評価も六十点以上を得るものがなかった。卒業生で詩人として名をなしていた川路柳虹に委嘱することとし、歌詞は九年初めに完成した。当初は鏑木欣作に作曲を依頼したが、彼が固辞し推薦した山田耕筰に委嘱することとなり、八年春に完成した。

翌昭和八年二月美校規程が改正され、予科一年、本科四年と定め、本科を日本画、油画、彫刻、工芸、建築科とした。明治二十九年以来の西洋画が油画に変更されたのだが、それは画材の違いによって日本画と領域を区別することを意味することになり、日本画だけが日本の絵画ではないことを示唆することにもなっていた。

さらに四月一日、校友会規則が改正され、役員は委員と総務委員とをおくと定めた。両者の任務分担は規則からは不分明だが、後者が執行役員だったのだろうか。職員委員を十六から二十名に増員し、学生委員を二十六名から二十名に減らした。また、総務委員も職員五名、生徒三名を会長が指名することとし、総じて学校による校友会への統制を強化された。総務部に剣道部以下十一の部を定めた。昭和九年に書道部が二十六名を集めて発足した。部長は廣川で、講師は比田井天来であった。



2 『校友会月報』第二号　1934年

これに伴い、これまでの『校友会月報』は昭和七年七月で廃刊され、新たに『校友会会報』が七月に創刊された。第二号（図2）から題字を比田井に依頼した。この号の表紙写真は岡部長景寄贈の仏頭である。これもたまたま金沢美術工芸大学に架蔵されて子細に検討したところ、当時の美校学生生活を知るのになかなか興味深く、ここに幾らか紹介してみたい。

八年六月校友会総務部に人事課が設けられ、学資困難な学生に内職を斡旋することになった。第二号に掲載された九年三月末の集計に依れば、三十六名の求職学生に二十一名が斡旋され、日本画科四名、油画科二名だった。求人は図案十四名がもっとも多く、絵画模写四のほかは挿絵、彫刻摸刻が各一名となっており、一九三〇年代の日本社会が美術学校生に何を期待していたかがよく示されている。また、同号に生徒の住所の調査結果が掲載されており、自宅が二五六名ともっとも多く、親戚と合わせると六九二名の四八％を占めており、昨今よりも比率が高いように思われる。

昭和九年三月に生徒の愛読する新聞雑誌の調査が行われ、それぞれ四九五、二八四名の回答が得られた。これによると、東京朝日新聞（二一八）、東京日日新聞（一八二）がよく読まれ、読売新聞（八二）は二紙の半分以下である。雑誌では、美術雑誌の『アトリエ』（二六〇）、『美術新論』（三〇）、『みづゑ』（二八）がよく読まれ、『美術雑誌』（二九）が健闘している。『美術教育』（二八）は油画科と師範科のみに読者が集中している。これに次ぐのは『文芸春秋』（二三）、『中央公論』（一九）、『キ

日付（昭和）	スコア	対戦相手
九年六月十四日	3—6	農大
二十日	6—10	宮内省造営課
二十一日	21—4	PCL
十年十一月七日	8—1	田園無敵軍
十一年五月二十日	14—0	東京全人形野球団
二十三日	9—3	音校
六月一日	8—5	音校
十一日	8—5	音校
十四日	5—4	東京高等工芸

ング』（一四）といった総合雑誌であるが、『科学画報』（一〇）は各科で挙げる回答があった。『新建築』、『国際建築』は建築科、『スター』は図案部のみが挙げているのは各専攻の興味がしからしめるところだろう。

前期校友会規則には挙げられていないのだが、美校に野球部があって、その活動が紹介されている。部長は建築科の金沢庸治で、準硬球を使っていたらしい。この頃美校は弱くはなかったようで、表のようなスコアが記されている。接戦だった高等工芸とは定期戦の計画が持ち上がった。

演劇部は美術班と演技班から成る舞台芸術部に改組され、旧演劇部員はほぼここで活動を続けたようで、昭和八年度当初の部員数は四十名と記録されている。顧問は村田良策だったようだ。七月一日に伊藤喜朔を招いて舞台装置プラン展と講演会を開催した。伊藤は展示された部員の装置はあまりに絵画的だと批評した。六月十六日にヘルマン・カザック「画家ゴッホ」（五幕を二幕に短縮）と志賀直哉「たのむ」を満員の講堂で上演した。ゴッホを演じた彫刻科の吉田芳夫は演出も担当した。吉田は木彫を家業とする家庭に生まれたが、卒業後昭和十三年（一九三八）柳原義達らと新制作派協会彫刻部を立ち上げることになる。十一月二十八日には全員で築地小劇場に「夜明け前」を観劇に出かけており、なかなか充実した活動のように思える。同部所属の図案科小池岩太郎は翌昭和十年卒業で、二月一日に若木で送別会が開かれた。

これも校友会規則には記載がないのだが、会報には継続的に短歌部の記事が掲載されている。顧問は廣川と藤澤古実だった。廣川は俳句部の部長も務め、こちらには和田校長が参加していた。二十名くらいが集まって、校内の倶楽部で歌会を開いている。部員のなかに鍛金部芳武茂介と図案科大智浩の名をみつけて、二人がごく近しく共通の場を共にしていたことを知り、意外の感に打たれた。芳武は昭和十年卒業後商工省工芸指導所に入り、長く製品デザイン開発に携わり、鋳鉄によるデザイン作品で知られるようになる。大智は今日ではほぼ忘れられているが、戦後日本のグラフィック・デザイン界において有力な理論家肌のリーダーの一人だった。二人の作品は明らかに傾向が異なっている。

大智浩

ポケットのごみをすつかりばらまいた、この下の川は今日が解禁

（九年五月）

ポツチリと街路樹の葉が舗道に落ちる汗をぬぐつて又あたふたと行く

（昭和九年六月）

初雪にたえざる枝の末ねたみ紅ばらの花一日地にあり（十一年）

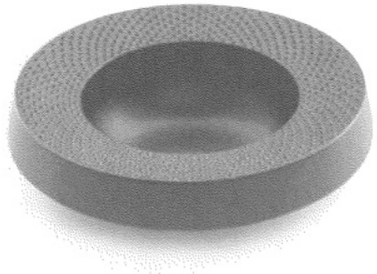
芳武茂介

ふるさとに帰りてすでにすべもなし厨に風呂の焚火燃したり（九年五月）

絵具箱柩に入れて君は逝きけりうつそみ我は雪山を描く（昭和九年六月）

若々と甦れる叔母の夢さめて開けたる空のまぶしさ見入る（十年）

明らかに大智は自由律や口語表現に傾いており、新しい短歌の動向に敏感であったことをうかがわせる。これは大智が後にグラフィックデザイナーとして海外の新しい波を日本に導入する姿に重なる。これ



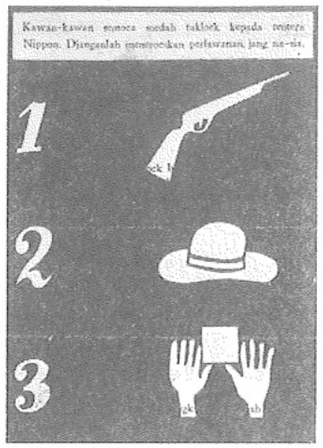
3　芳武茂介《霞灰皿》

に対し芳武は常に抒情的に自己の心情を正直に歌おうとしており、とくに若い日に遭遇したらしい知友の死に大きな衝撃を受けたようで、若い在学時の感情の振幅の深さを感じさせる。また同時に、自らの根差す精神的土壌を肯定的に受け止めているようにも感じられる。これは彼の鋳造作品〔図3〕の表情にも通じるのではなかろうか。

＊　＊

大智は昭和八年東京美術学校図案科に入る前、昭和四年（一九二九）に長岡高等工業学校電気工学科を卒業しているので、同期生より三年ほど年長だったはずである。十三年美校卒業後、味の素広告課〔図4〕に勤務したが、十六年に理研電機宣伝課長となった。しかし、十二月に陸軍報道班員として徴用され、占領地での宣伝に従事することになる。

4　大智浩《味の素ポスター》1935年（『アイデア』第128号）



5　投降票（『戦う文化部隊』）

これは陸軍最初の宣伝班で町田敬二少尉が組織したのであった。町田は後にこの活動を『戦う文化部隊』（原書房、昭和四十二年）にまとめている。徴用された様々な職業の専門家は陸軍大学校に集められ訓練を受け、その後高雄に移動して待機となった。大智は資料班に配属され、敵軍向けの伝単、投降票〔図5〕の作成や現地住民向けの資源破壊防止、治安維持の伝単、ポスター制作にあたった。二月二十八日ジャワ島上陸直前に輸送船は砲撃を受けたが、一名の死者を出しただけで済んだ。この部隊には集められたと町田が記しているのは大宅壮一、武田麟太郎、阿部知二、富沢有為男、北原武夫、郡司次郎正、大江賢次、大木敦夫（文学）、清水宜雄（哲学）、南政善、佐々木英雄、城取春生（画家）、河野鷹思、大智（商業美術）、横山隆一（漫画）、石本統吉、倉田文人、松井翠声（映画）、飯田信夫、郡司次郎（音楽）のほかインドネシア独立運動にかかわっていたラーデン・スジョノ、市来竜夫、清水斉らである〔図6〕。町田の記録を読むと、確かに占領後に反植民地、日本親和を新聞、ラジオ、映画、音楽、学校教育、演劇と広範に活動を展開していたことが

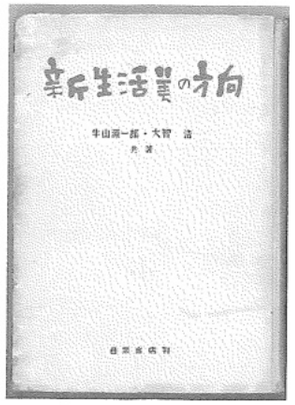
6　上陸後の宣伝班員（中央腰に手をやるのは河野鷹思）

7　大智浩《3A運動ポスター》
一九四三年頃（『アイデア』第一二八号）

分かる。インドネシアで大智が制作したポスター〔図7〕はプロパガンダ戦によく用いられた技法や扇情的な色彩がなく、ややおとなしい印象を受けるのは大智の個性の故なのだろうか。

大智はこの少し前から銀座松屋で染織デザインを担当していた牛山源一郎と共著で『新生活の方向』（目黒書店、昭和十九年）〔図8〕を準備していたのだが、一九年一月に海軍儀技術研究所実験心理研究室に勤務することとなり、帰国したので、著書に戦地での実体験を織り込むことが出来た。この著作は色彩と形態の原理的研究とそれの基づく指導を説いたもので、海外の理論的成果を参照しつつ、日本独自の方向を示そうとする狙いを持っていた。末尾には国家宣伝ポスターと偽装迷彩の章でしめくくられ、色彩造形論の実用的効用を強調している。

戦後大智は昭和二十年十一月に電通企画部長を務め、二十四年（一九四九）六月には大智浩デザイン事務所を主宰し、同年日本宣伝美術会の創設にも参加した。昭和二十九年十月ニューヨークで個展を開き、アメリカ、ヨーロッパで多くのデザイナーを訪れた。この年末には国際グラフィック連盟AGI日本代表に選ばれ、海外に活動の足跡も多



8　『新生活の方向』1944年

い。東京教育大学教育学部（一九五〇）、山形大学教育学部（一九五二）、金沢美術工芸大学（一九五五）、信州大学教育学部（一九六三）、実践女子大学被服学部（一九六五）と教育にも携わり続けた。また、昭和二十八年から『アイデア』のアートディレクターを一二六号まで二十一年間にわたって務めたことは浮き沈みの激しいこの世界では特筆に値する業績ではないだろうか。

ポスターでは強く印象に残る作品が少ないのは彼が描くことを基幹とする時代の色彩、形態理論やその再現技術に長けており、その後グラフィック・デザインは写真や構成を主体とし、大きく様変わりしたためなのだろうか。むしろ、トレードマーク〔図9〕やパッケージ〔図10〕に今日まで生きながらえている例が見いだせるのは大智の洗練された近代的な造形感覚は時代を超える魅力を備えているからのように思える。デザイナーが実りある成果を生み出す根拠が理論への依拠よりも独自の個性的感覚に由来している結果になっていることは甚だ興味深いように思える。この意味で、大智のデザイン力は時代を超えて生き残る価値のあるものだったのではないだろうか。

9　出光興産マーク

10　キリン・レモン

古書を見る、古書を読む

二〇一八年十二月十二～十九日、一月

山田　俊幸

○月×日

なんということか、この頃の本の値段の下落。高円寺の古書展は廉いとはいっても、ひどいことになっている。

吉川幸次郎『杜詩集註』が四冊六百円（筑摩）、『荷風全集』の「断腸亭日常」が五冊で五百円（岩波）とは、量産本の端本だろうが、何をか言わんやだ。吉川さんの本などは、場所を取る、重い、などということを別にすれば、ゆっくりとさらい読みをしてみたい本だ。以前、ここで大日本史料の『小右記』だったか、端本を一冊百円で購い、眼を通したことがあったが、もったいない話である。ならば、可愛想などと言っていないで精力的に購った方がいいだろうと言われそうだが、こちらも現在はそういう生活形態にない。

自分で、「読書」という最上の楽しみを放棄しておいて、蒐書にはしったのがこの結果。また、出版物の方からすると、戦後から続いた出版バブルにおどらされて、千部どまりで（と言いたいが、さすがに会社だから二千部でもいい）上質の読者の元に届けるべきものが、全国の図書館が買う、学校の図書館が必備にする、家庭のディスプレーとしても機能させるという、そんな魂胆で一万部、二万部と製作したのが、この事態をもたらしたのだろう。

昨日、お茶の水で、青木さんが民族学系の本を持っているのを見て、ついついお互いに大変ですねと、挨拶をしてしまった。それは、たぶんお互いに高ければ敬遠しそうなものなのに、あまりに廉いので哀れになり、ということと、以前から気になっていることが書かれていそうで、ちょっと眼を通したいということでの購入だろう。

図書館でみればいいという御仁もあるだろうが、今の公立図書館は文学全集ひとつ揃えていないところが多くなった。司書のコースが、単に就職のためだけに設けられているようだから、「図書館」を「知の百科全書」「知のワールド」とは館員（とりわけ、現場のトップ）が、考えていないらしい。だから、青木さんもわたしも、時々は購うしかないのである。使い終わったらどうするか。できるだけ、あげるようにしよう。

さて、ひさしぶりに見るここでは、本が百円、二百円。絵葉書は二百円から五百円だから、今の古本屋さんの、本から他の物（絵葉書、骨董など）へのスライドの様子がなんとなく分かる。絵葉書は仕分けが面倒ということを以前は聞いたりしたが、箱買いといって一箱数千円で買って、何百枚と入っている絵葉書を一枚百円で売っても十分成り立つらしい。盗難に遭うという難点もあるが、しかし重い本よりもあいそがいい。それでだろう、絵葉書、チラシのたぐいはよく出ている。瑞香書房、古書ドリルなどはこの会に、未整理に値付けをして出している。おもいがけなく拾ったのが、多田北烏の『幼年倶楽部』七月号広告絵葉書と、トルコの消防士の海外絵葉書。二つで五百円。今回の予算は二千円。

この日は骨董はほとんど見当たらず、雑誌を中心として見ていく。す